哲學研究　第百四十三號　第十三卷第二册

先驗生成的方法について

——亡き父の靈に捧ぐ——

赤松元通

一

一般に生成的方法とは生成(genesis)を明かにせんとする方法、云ひ換へれば、過程を明かにせんとする方法と云ふことが出來る。認識に於ける生成的方法は、認識が如何にして生成するか、如何なる段階を經て發展するか、等を明かにせんとする。然し乍らかくの如き方法は、果たしてよく認識の本質を明かにし得るであらうか。此の事に關して吾々は、既に、カントがかくの如き生成的方法に對して斷然その無力なる事を論じてゐるのを知つてゐる。

カントはその認識論に於いて、批判的方法、或は先驗的方法を唱へて、經驗的方法及

び形而上學的方法に反對してゐるのである。經驗的方法といふのは「如何にして概念が經驗、及び此れに關する反省によつて得られたか」を明かにせんとする方法であり、形而上學的方法とは、豫め認識能力の制限を反省することなくして、それを直ちに超越的本體界に適用せんとする方法である。從つて此の方法は又批判的方法に對して獨斷的方法とも呼ぶことが出來る。此の形而上學的方法の問題に關しては、當面の生成的方法の問題に對して余り重要でない故に、暫らく觸れずに置き、經驗的方法のみに考察を向けやうと思ふ。カントによれば經驗的方法は、認識論の方法としては到底不充分なものたるを免れない。何となれは經驗的方法は、唯だ事實を明かにするのみであるが(quid facti)認識論の課題は決して此の點にあるのではなくして、むしろ事實の權利根據を問ふこと(quid juris)にあるからである。認識論の問題が斯くの如き事實の基礎づけ、價値にある限り、經驗的方法の說明する如き「如何にしてそれが云々の事實、もしくは起原より生じたか」を明かにしても「何故にかくあらねばならぬか」は明かにならぬ事は云ふまでもない。カントによれば、それは單に「純粹認識を事實上所有してゐると云ふ事の說明(Die Erklärung des Besiszes einer reinen Erkenntnis)にして眞の意味での認識の演繹卽ちRechtmässigkeit若くはRechtfertigungとはならない。

Deduktion ではなくして單に事實的例證 Illustration を擧ぐるに過ぎない樣な概念、若しくは認識のかくの如き導き出し方をカントは physiologische Ableitung 生理學的導出と云ひ、此れに對してアプリオリなる概念が如何にして、對象に關係するかを明かにする仕方を彼は先驗的演繹と呼んでゐる。此の場合、カントが經驗的演繹と云つてゐるものゝ中に當然生成的方法も亦含まれてゐると云ふ事は明かである。

否、むしろ經驗的方法といふのは、認識を一つの事實と見て、それに對してそれの原因となる如き事實を求め、かくて遂にそれの起原と認めらるゝ如きものを得て、此れよりその認識は生成して來たものであると說明する事によつて、その最初の目的を充分に達すると考へられ得るが故に、經驗的方法は事實上又生成的方法となると云ふ事が出來る。

從つて生成的方法はカントによつて全く、認識論に於いて無力なものとして考へられたのであるが、然し生成的方法は果たして、認識論に於いて全く無力なものであらうか。或は少くとも生成的方法の中に於いて批判的方法と矛盾しないものがないであらうか。若しあるとすればかゝる方法と批判的方法との關係は如何に考ふべきであらうか。此れらが此の小篇に於いて考察して見やうと思ふ問題である。

かゝる方法について論ずる前に、吾々はカントの、かくの如き考方を一層徹底的に論じて、生成的方法を批判的方法に對して全く對照的に對立せしめ、そして哲學の根本問題の解決に對して、前者の無力なることを論じてゐるウィンデルバントの考*を考察しやうと思ふ。

二

* Kritische oder genetische Methode? (Präludien II)

ウィンデルバントによれば哲學の問題は公理の妥當であると云ふ事が出來る。そして此の事を明かにする爲めに、彼は先づ科學的證明の二つの方法卽ち演繹法と歸納法との兩方法が最後に豫想すべきものとして、一方に於いては最も普遍的なる命題卽ち公理と、他方に於いては、最も特殊的なる事實卽ち感覺とを考へてゐる。演繹法、歸納法は唯だ此の中間域に於いてのみ働き、そして此の中間域に介在するものとして、その確實性、及び眞理性は、唯だかの二つの根本豫想に依存するのである。從つてそれらの確實性は間接的であるが、此の二つのものゝ確實性は全く直接的であり、從つて絕對的に確實でなければならぬ。而して此の兩者の關係については、結局は、個々の感覺は、一般的な公理のもとに包攝され得る、或はそれに適合する性質を有

するもの、と考へられなければならぬ。此處にロッツェの所謂「幸運なる事實」が認められねばならぬ。然し此の場合の必然性は全く目的論的の必然性であつて、云はゞ絶對的の要求である。卽ち若し一般に吾々にとつて、思惟が可能であるべきであるならば、絶對的に要求せられる所のものである、と云ふ意味に於いてのみ必然的である。特殊と普遍とは認識には缺くべからざる要素であつて、全く特殊のみ、又は普遍のみからは何物も出て來ない事は明かである。卽ち凡ての認識過程には一方に於いては、特殊的な感覺が基礎になつてゐる樣に、又他方に於いては、一般的な公理が基礎として豫想されてゐる。*

* ウインデルバントは感覺、公理といふ二つの極の中唯だ、公理の要求の承認のみを批判哲學の問題と考へたが、然し此の感覺の方の要求を何らかの意味に於いて認めるといふ事も哲學の問題になり得ると云ひ得ないであらうか。此の點については此の論文の最後の所を參照。

ウインデルバントによれば、かくの如き凡ての科學的認識の根抵に於いて働いてゐる所の一般的な公理の體系を立て、此れらの、認識活動に對する關係を明かにするのが理論哲學、卽ち哲學の一分科としての論理學であるが、公理といふ概念を更に擴張して用ふるならば、倫理的領域、美的領域に於いても、同じくそれら領域に於いて根

本的に承認を要求する所のものに關する哲學が成り立ち得る。かくて哲學の一般的問題は已に述べた如く、公理の妥當といふ事になるのである。然し此の公理の妥當を問題とする際に、既に論せられた如く、公理なる概念そのものが「不可證明的」といふ事を含むが故に、決して科學的證明法としての演繹法及び歸納法をとる事は出來ない。何となれば、演繹法及び歸納法が既に此の公理の妥當を豫想してゐるからである。かくて、ウィンデルバントによれば此の公理の妥當を明かにするに唯だ二つの道があると云ふ。一つは事實的妥當を示すこと、卽ち人間の表象、意志、感情等の現實の過程に於いて、此れらの公理が事實上妥當するものとして承認せられてゐる事を示すことであり、他はそれらの公理に對して目的論的必然性があるといふこと、卽ち一定の目的が充さるべきであるならば、その妥當は絕對的に承認せられなければならぬといふ事を示すことである。前者は卽ち生成的方法を取る哲學の態度であり、後者は批判的方法をとる哲學の態度であると云ふ。從つて生成的方法にとつては公理は人間の表象、意志決定、感情などに於いて形成され、その中に於いて妥當し來つた所の事實上の理解法（ゲノッツィオンスメトーデ）であるに對し、批判的方法にとつては、それは、思惟が眞であるといふ目的を意欲が善であると云ふ目的を感情が美であるといふ目的を一般的

に承認せらるべき方法によつて充さんと欲すると云ふ豫想の元に於いて妥當すべき所の規範である。此際勿論、どの範圍までそれが事實上承認せられてゐるか、などゝいふ事は問題ではない。

然し乍ら此處に批判的方法に對して向けられる一つの非難がある。それは、批判的方法は明かなる循還論を犯してゐる、何となれば批判的方法が明かにせんとするのは、眞としての認識、善としての意欲、美としての感情であるといふが、然しかゝるものをその最初に於いて既に豫想してゐるが故である。此れに對してウィンデルバントは云ふ。確かに循還論ではあるが、然し此の循還論は、實は避け難き循還論である。論理的に正しく思惟することなしに、論理的探究を果たして成し得るであらうか。從つて批判的研究も勿論、正しき思惟を、そして又それが從ふべき規範を豫想せずしては、決して爲される事は出來ない。むしろかゝる價値を豫想しつゝ、それの論理的制約を明かにせんとするものである。一方生成的方法を見るに批判的方法よりも遙かに多くの豫想を持つてゐると云はなければならぬ。何となれば生成的方法が論理的探究である限り、批判的方法が豫想すべき形式的な規範を豫想すべきは勿論にして、その外に、生成的方法が事實に關する限り、事實確定、及び、此れに基づく、若

しくは關係する凡ての理論が基づく所の[前判斷] Vorurteil・それの妥當が示されねばならぬ所の認識論の公理を豫想してゐるのである。尙此れらの外に、心理學的、若しくは心理學的歷史的認識の豐富なる材料を豫想してゐるといふ事が出來る。事實的妥當を示すと云ふ事は心理學と文化史の地盤の上に於いて可能であるが故に、生成的方法にとつては心理學と文化史が哲學的探究の中心點となり、此れらの學問の材料(データ)が哲學にとつて決定的な認識材料となるであらう。

今一歩を讓つて此れらの豫想、若しくは決定材料の多き事を度外視するとしても、生成的方法は、それが明かにせんとするものを決して充分に成し遂げてゐない事、否むしろかゝる事は一つの望みなき試みである、といふが明かであると思ふ。何となれば此れは凡ての理論・Theorie が豫想すべき所のものを經驗的理論によつて基礎づけんとするからである。此の事を尙ほ許すとしても此の試みが尤も成功した所で結局それは公理が事實上妥當してゐると云ふ事を確認し、それを心的生活の法則より理解するといふ事に外ならない。唯だ單に事實上の妥當と云ふ意味に於いてのみ「妥當」が考へられるならば公理の妥當も單に個人的な、偶然的なもので、決して凡ての人に對して、又如何なる時に於いても、と云ふ意味は失はれなければならぬ。此の

事は種族(ガツトウング)に對しても、個體の場合と全く同樣である。個人の意識のみならず多數卽種族の意識に於ける妥當を求めるとしても、それが事實的なる限り、決して絕對的なる妥當に到り得ない事は明かである。事實的承認の量は決して規範性の證明とはならない。

尙ほ生成的方法に對する一つの難點は、それの考察法が個人、若しくは種族の心的生活の自然必然的なる過程に基づいてゐると云ふ點より、物を、それが自然必然的に妥當する故を以つて、全く相對的のものと見、從つて絕對的なる標準を否定しなければならず、かくて相對論が必然的な歸結とならなければならぬ、と云ふ事である。

尙ほ、事實的妥當をば、歷史的發展に於いて基礎づけ樣とする試みも、高々「歷史的必然性」を示し得るに止まり、決して公理の妥當そのもの、云ひ換へれば「規範的必然性」を明かにする事は出來ない。成程規範意識を歷史的發展に於いて開展せしめると云ふ事は、勿論歷史的課題ではあるであらうが、然しかくの如くしては決して哲學そのものゝ問題は解決されない。一般に凡ての發展史的研究、及び經驗的探究は、既に規範意識の全體系を豫想してゐると云はなければならぬ。

此處に於いて、もう一度批判的方法を顧みて見ると、既に述べた如く、批判的方法は、

何物かゞ一般に普遍的妥當を持つべき限り、それの根本原理が承認されなければならぬ樣な規範意識が存する事を豫想するのみであるが、然し此處に此の方法にとつて一つの危險が伴ふ如くに思はれる。それは批判的方法は單に經驗的な個人にのみ妥當する如きものを、絕對的な規範だと考へる恐れがあると云ふ事である。此の「哲學する個人」の立場を絕對的規範にまで高めるといふ誤りは、然し決して批判的方法そのものゝ誤りではない。批判的方法の要求する明證（エヴィデンツ）は決して單純なる、直接なるものではなくして、むしろ一定の體系的の標準によつて媒介せられたる、從つてその故に、是正せられ補正せられたる所の明證である。

此の事の爲めに此處に批判的方法に一つの新しい特性が與へられる。即ち、かつてフィヒテがカントの批判的方法に導き入れた所の目的論的關聯の原理である。從つて理論哲學としての論理學の體系は、目的論的に開展せらるべき原則……これなくしては決して普遍妥當的なる思惟は存し得ない樣な――總體である。倫理學、美學についても、勿論同樣の事が云ひ得る。

然しウィンデルバントによればフィヒテの知識學は一つの誤りを犯してゐる。即ち唯づ目的の規定のみよりして、それの實現に對する凡ての手段をも演繹し得る

と考へた事である。此の爲めにフィヒテは辨證論的方法に轉じたのである。然しかくの如き方法をとつても、決して特殊の多樣は原理よりは導出す事は出來ない。此處に目的論的構成としての批判的方法が生成的方法及び辨證論的方法に對して有する特性が見出される。卽ち生成的方法及び目的論的辨證論的方法は共に(勿論意味は異なるが)素材を顧慮せざるを得ないが、批判的方法は妥當を基礎づけんが爲めには、全く素材を要せないのである。然し乍ら批判的方法が素材を要せないのは、或は、それら素材に對して方法論的無力を主張するのは、全く規範の基礎づけに關してのみであつて、規範の組織的發見、及びその妥當の正當さに對する關聯的な省察(ベジンヌング)を可能ならしめるものとしては、かゝる、心理的、或は歷史的事實も方法論的に、ある積極的な意味を有すると考へる事が出來る。卽ち批判的方法は、それら事實に於いて、哲學的吟味(プリューフング)及び省察をなすのである。換言すれば哲學は、心理學或は歷史をば規範の秩序的發見の手引として用ふるのである。かくて經驗的心理學、及び歷史的發展が哲學に對して有する意義關係なども明かとなると思ふ。

以上はウィンデルバントの哲學的方法に關する考の大要であるが、此れによつても知りうる如く、彼の批判的方法と云ふのは、カントの批判的方法を論理的に徹底せ

しめると共に、目的論的背景の上に此れを發展せしめたものと云ふ事が出來るであらう。

扨て以上の如きウィンデルバントの考、或はそれの背景をなしてゐる思想の中から、今吾々の問題にとつて重要であると思はれる點を選り出して見やう。

第一には、先づ彼の心理學に對する考であるが、彼が上述の論文に於いて心理學と云つてゐる所のものは、常に經驗的事實としての精神作用に於ける一般法則的なものを探究せんとする所の經驗的心理學を意味してゐる事は明かであらう。尤も彼が他の所で(例へば哲學概論などに於いて)述べてゐる考によれば、かゝる云はゞ自然科學としての心理學の外に文化科學としての心理學、例へば性格學(Charakterologie)の如きものゝ可能性を認めてゐる樣であるが、何れにしても、特殊學としての心理學であつて、哲學としての心理學については、彼は尙ほ明かなる考を述べてゐない樣に思はれる。*

* 尤も近世哲學史カントの章、及、System der Kategorien の中に transzendentale Psychologie といふ言葉は見出すことは出來るが然しそれについての考は別に積極的に述べてゐない樣である。

次には彼の生成並びに生成的方法に對する考である。此れも上述の彼の論文に

よつて明かな如く、生成は經驗的事實的生成を意味し、從つて生成的方法は、かくの如き經驗的事實の生成によつて、換言すれば、時間的に、因果的に制約せられたる生成によつて價値を明かにせんとする方法といふ意味である。

然し乍らウィンデルバントによれば、かゝる意味の生成の外に、尙一つの生成の意味も見出されうると思ふ。卽ち彼れがアプリオリな概念、卽範疇そのものゝ論理的發展を明かにせんとした事、卽ち目的論的立場に於いて範疇の體系を發展せしめ樣とした點(論理學は卽ち此の體系に外ならない)に於いて範疇の生成を考へたと云ふ事が云ひ得ないであらうか。勿論純粹に論理的の意味に於いてゞはあるが、範疇を單にそれだけとして獨立に見るのではなくして、それを由來によつて、卽ちそれの論理的起原に溯つて、それより開展するものとして考へ樣と云ふ意味に於いて一種の生成的見方と云ひ得ないであらうか。勿論彼は此の意味の生成に「生成」といふ概念を使用してはゐないのであるが、生成と云ふ概念を廣義に用ふるならば此れをも生成の中に含ましめる事は果たして出來ないであらうか。

此の意味に於ける生成的方法は、明かに論理的基礎づけに於いても、缺くべからざる方法と見ることが出來るであらう。此の意味の、卽ち論理的、生成的方法は、カント

の批判的方法に對して決して矛盾しないのみならず、*カントを純論理的に解釋、發展せしめたる現今の論理主義と云はるゝ新カント學派の論理的方法に對しても矛盾しないことは上述の如くである。

* カント自身、明かに、範疇の體系的關聯を考へてゐたと云ふ點よりして、カントの批判的方法に於いても、かゝる論理的生成的方法が働いてゐたと云ふ事が云ひ得るであらう。

今、心理學及び此の廣き意味での生成的方法の問題を暫らく未解決のまゝに殘して、吾々は更にマ！ルブルグ學派に於いて、カントの批判的方法が如何に發展せしめられたかを考察しやうと思ふ。

三

コーヘンはカントの中心思想として先驗的方法の思想をとらへ、カントに於ける他の凡てのものは、此の思想に關係せしめ、此の思想から理解し、評價すべきものと考へた*のである。方法を重視する此の學派にとつては當然の事でなければならないと思はれる。哲學を以つて批判であり方法論(Traktat von der methode)であると考へるカント自身も勿論、方法を重視したでもあらうが「哲學は方法である」*といふ此の學派の立場は更にカントのかゝる考方を徹底せしめたものと考へる事が出來る。

* P. Natorp, Kant und die Marburger Schule

** 〃 〃 〃 〃

ナトルプの云ふ所によれば先驗的方法には大體二つの要求が含まれてゐる、と見ることが出來る。その一つと云ふのは、卽ち學問、道德、藝術宗敎などの如き、歷史的に示される所の事實、卽ち文化現象に對して確實なる關係をつける事である。卽ち形而上學的砂上樓閣を避けて、經驗的地盤の上に確實なる根ざしを得んと努めるのである。第二には此れらの事實、卽ち客觀的產物に對して、それの基礎である所の法則——ロゴスの法則、ラチオの法則、或は理性の法則——によつてそれらに可能性の根據を與へ、又それと共に權利根據を與へると云ふ事、云ひ換へれば、文化の創造的行爲に於いて、法則的根據を示し、そしてそれを純粹なるものに成し遂げると云ふ事である。此の事は卽ち種々の文化領域に於けるアプリオリを明かにすると云ふ事に外ならないが、此のアプリオリもコーヘンの云ふ如く嚴*密に考へれば二面を區別する事が出來る。形而上學的アプリオリと先驗的アプリオリである。此の事は勿論カントの形而上學的演繹(若しくは說明)及び先驗的演繹**の區別に相應するものであるが、形而上學的演繹とは心理學的分析によつては決して達し得ざる認識の根源的要

素を發見し、指示する方法、卽ち概念をアプリオリに與へられたものとして、換言すれば、經驗によつては與へられず、その基礎を經驗に有せざるものとして指示する所の方法であり、かゝる方法によつて見出されたるものは、先づ形而上學的アプリオリとも名づけらるべきものである。然しかゝる形而上學的アプリオリは、尙ほ無規定であつて、唯、それの外的特徵として嚴密なる必然性と、普遍妥當性を有すると云ふに過ぎない、それが如何なるものであるかは未だ規定されてゐない。かくて形而上學的演繹は必然的に先驗的に演繹を要求しなければならぬ。先驗的演繹こそ批判的方法の核心であつて、かくの如き、認識的意識に於ける非經驗的要素卽ち形而上學的アプリオリが科學の事實 Faktum der Wissenschaft を基礎づけ、確定するに必要にして充分なる要素なることを明かにするのである。卽ち意識のアプリオリな要素は單に、それだけとしてあるのではなくして、科學の根抵として働かねばならぬ。アプリオリは先驗的アプリオリとして、始めて經驗の可能性の根據となりうるのである。アプリオリは、形而上學的アプリオリより更に先驗的アプリオリになつて始めて內容を得るといふ事が出來る。先驗的方法の本質は、かくの如き意味に於ける先驗的アプリオリを明かにする方法であるといふ事が出來るであらう。

* H. Cohen, Kants Theorie der Erfahrung. 3. aufl. s. 93. ff, 135ff, 179. f, 375ff,

** カントは、時間、空間の場合に於いては、Erörterung なる概念を、範疇の場合に於いては Deduktion なる概念を用ひてゐる。

然らば此の方法は勿論文化の創造的行爲そのものを超越すると云はなければならぬが、然し此の事は決して經驗の立場の内在と云ふ事とは矛盾しない、むしろそれと一致すると考へられる。何となれば先驗的方法は決して經驗に對して、それ以外より法則を強いんとするものではなく、むしろ行爲そのものゝ中に働き、行爲一般を可能ならしめる所の法則を、それの純粹なる形に於いて現はし、かくて行爲が自らの法則を確實に意識し、更に、獨立に前進を續ける事に對して、それの保證をなして、むしろ外部よりの干渉を斥けるからである。かくて先驗的方法は一方他律的法則を強いる所の形而上學的超越に對し、他方又、法則を避ける所の經驗主義の無律に對して、正當に經驗、即ち文化の創造的行爲の自律を主張するのである。

而して更に、先驗的方法は内在的方法として、此の文化創造の法則をば、文化の客觀的產物そのものに於いてより外に求めないが故に、此處に先驗的方法の客觀的な性質が生じ來るのである。此の點に於いて先驗的方法は凡ての心理主義——此の法則を主觀的經驗的意識の法則によつて基礎づけんとする——とは明確に區別せら

れねばならぬ。

尙ほ、先驗的方法の內在的なる點より導出される特質は此の方法それ自身の動的性質である。先驗的方法はそれ自身進步的、發展的である。否無限の發展にも堪へうるのである。何となれば方法とは勿論、固定的な型の如きものとしてゞはなく、むしろ理念そのものゝ發展として解せらるべきものであるからである。理念の發展とは又、創造的なる文化の行爲そのものゝ純粹なるもの das Reine の發展でなければならぬからである。無限なる進行は然し乍ら決して單なる進動、卽ち無方向なる運動と解せられない。むしろ確實なる方向への運動、目的に向つての運動でなければならぬ。かくて眞の理想主義は決して、エレア風の存在の理想主義ではなくして、概念の運動の理想主義、或は無限定なるものゝ限定、永遠に「實在となる」の理想主義でなければならぬ。哲學は種々の新なる問題に於いて「ある方法」を求めるのではなくして、むしろ「方法そのもの」を求めるのである。換言すれば認識の究極的統一と、並に文化の創造的行爲の究極的統一との根據をなせる方法の究極的統一を求めるのである。此の事をコーヘンは彼の根源の原理に於いて力强く純粹に云ひ表はしてゐる。卽ち如何なる物も創造的認識の終局の統一根據にまで導かずしては、或はかゝるも

のへ導くことの豫想を示さずしては「與へられてゐる」といふ事は云ひ得ないといふ意味である。かくて與へられるといふ事は思惟の課題として與へられる、或は解決さるべきXとして與へられる、といふ意味を得ねばならぬ。此の課題は永久に課題として續くのであつて、かくて認識は過程であり、永遠の生成卽ちFieriであると云ふ事が明瞭に理解せられる。かくの如くコーヘン及びナトルプによればカントの先驗的方法を無限なる創造的發展の方法として理解する事によつて、その不朽の根本內容を明かにし、純粹にすることが出來ると考へるのである。*

* 方法といふことを、固定的な型としてではなく、かくの如く內容の發展そのものを指導し、方向づける所の動的なる理念と解することによつてマックス、シエーラーが非難するが如き、先驗的方法の種々の難點、例へば先驗的方法は個々の進步的な積極的科學の事實を離れ、それらの進步に適應しないが故に、それらを眞に基礎づけ得ないといふ考や、又認識の批判的規準を與へんとするそれの要求を實際充し得ないとか、又先驗的方法は、論理的還元をなすことによつて、徒らに認識過程を二重にするものであるとか等いふ難點は、救はれる事が出來ると思はれる。
Max Scheler, Die transzendentale und psychologische methode. s. 53ff.

以上述べた如くマールブルグ學派に於いても、バーデン學派と同じく先驗的方法を、經驗的發生を說くところの心理學的方法より全然區別し、後者の到底達し得ざる限界を明確に認めてゐるのであるが、それと共にマールブルグ學派では經驗的心理

學以外に哲學の領域内に心理學の一領域を認めて、前者とは別なる心理學を立てんとしてゐる點が注意せらるべきである。此の事はコーヘンに於いては彼の論理學の中に所々[2]斷片的に、うかゞはれるのであるがナトルプ[3]に於いて、吾々はかゝる心理學に對しての統一的な考を知ることが出來るのである。

1、尤もリッケルトは後に述べる如く、「認識論の二つの道」に於いて先驗的心理學を、先驗的論理學に對立せしめて論じてゐる。

2. Cohen, Logik 2. aufl. B.Z s, 17ff, s. 427ff, s. 434 u. s. f.

3. Natorp, allgemeine Psychologie I, allg. Psych. in Leitsätzen.

此の事については後に述べるとして尙ほ、此れに關聯してもう一つ注意すべき點は以上のべたコーヘン、並にナトルプらの生成に對する考である。經驗的生成に關しては今述べた通りであるが、此の學派に於いては、生產、もしくは發展を力說する考方より、方法、從つて原理そのものゝ發展を說いてゐるのである。吾々は既にウインデルバントの場合に於いても、廣き意味に於いて、範疇の發展を說いてゐることを見たのであるが、然し同じく原理の發展といつても此の學派に於ける原理の發展は、ウインデルバントに於いて考へられるが如き意味での範疇の發展とは多少區別しなければならぬ點があると思はれる。勿論兩者とも、時間的な、心理學的な意味での發

展ではないが故に、その點に於いて共に論理的と云ひ得るでもあらうが、然しウィンデルバントらと異つて、マールブルグ學派に於いては、作用と對象或は內容と範疇とを峻別せず、むしろ同一作用の二面、或は二方向として、全く相關的なものと考へるが故に、後者に於いての發展卽ち生成は前者のそれが內容を抽象し、度外視したる純形式の論理的生成と考へられるに對し、むしろ內容を含んだる或はそれを溶かし込んだる生成と考へることが出來るであらう。原ちマールブルグ學派にあつては內容は決して、原理と離しては考へることの出來ないもの、內容を生產する事が論理的發展と考へられるのである。而かも又一面から云へば、內容そのものが論理的に生產されたものとして、又論理的なものでなければならないのである。認識或は、科學の事實が生成卽ち Fieri であると云はれるのも、かゝる意味に於いてゞある。此の學派に於いては、絕對的に合理化せられずに、吾々の思惟とは全く無關係に、與へられてあるが如きものは決して許容し得ない所の概念であつて、よく云はれる如く與へられてあるといふ事は解決すべく、卽ち限定すべく與へられてある、換言すれは課せられてあると考へられるのである。かくの如く內容そのもの、及び內容に對する思惟の關係の考方の相異より、兩學派に於ける生成の意味の相異も自ら明かとなると思は

れる。

以上考察した所によつて見るも生成と云ふ概念が種々の意味に理解され得、又理解せられてゐるといふ事、並に上に述べた如き論理主義の立場より認識の本質を明かにせんとする考方に於いて、心理學的方法は常に力強く否定され、又壓迫されてはゐつゝも、尙、何等かの仕方に於いて道を求め、何らかの正當さを要求せんとしてゐるといふ事が看取されうると思はれる。

吾々は次に、如何なる意味に於いて生成と云ふ概念が先驗哲學に於いて正當に認められうるか、又かゝる概念と、今や新しく承認を要求してゐる所の心理學的なものとの間に如何なる關係が考へられるか、といふ樣な問題を考察して見やうと思ふ。

四

此の問題に入るに先だち、それの準備として、先づ生成的方法の種類を擧げて見やうと思ふ。勿論此れは決して完全なる列擧、若しくは、分類といふ如きものではなく、單に一つの試みに過ぎないのであつて、此の目的は要するに、經驗的生成に對して先驗的生成の位置を明かにせんとするにすぎないのである。生成的方法は先づ大別して、經驗的と先驗的とに對立せしめられると思ふ。經驗的生成的方法とは、經驗的

事實の生成によつて對象を說明せんとするのであるが、此の事實が個人的なものであるか、社會的なものであるかによつて又二つに分れるが、個人的なものゝ中には又生理學的方法、心理學的方法を區別しうるであらう。心理學的方法といふのは、心的事實の生成によつて、生理學的方法といふのは、生理的事實の生成によつて、對象を說明せんとするものである。一方社會的のものにも、やはり、民族心理學的說明の如き心理學的方法があり、又客觀的な、文化史的說明が考へられる。扨て此れら經驗的生成的方法に對して先驗的生成的方法といふのは、經驗の構成的形式若しくは客觀的なる經驗そのものを、經驗的事實の生成によつてゞはなく、純粹に論理的に、それの根源より如何に生成したか、若しくは、それら客觀的なるものが主觀的なるもの卽ち具體的體驗、或は直觀より如何に生成したか、を明かにする方法といふ事が出來る。從つて此の中にも二つの方向、ナトルプの言葉を借れば客觀化的方向と主觀化的方向との二つを區別する事が出來る。客觀化的方向の中には、例へばウインデルバントの場合の如く內容を抽象した範疇そのものゝ純論理的發展を考へるものと、コーヘン、ナトルプらの如き論理的な內容生產作用そのものゝ生成を論ずるものとが考へられる。然るに主觀化的方向に於いては、凡ての合法則的生產そのものは皆客觀化

の方向であるとして、唯だ、此れら客觀的なるものが原體驗としての主觀そのものに於いて如何なる關係にあつたか、換言すれば、此れより如何に生成したかを明かにする方法が考へられる。ナトルプの主張しやうとする主觀化的再構成的方法が、かくの如き見方からも考へられうると思ふのであるが、此の事については後に詳しく論ずるつもりである。以上述べた事を便宜の爲めに表にして見れば次の如くになる。

- 生成的方法
  - 經驗的
    - 個人的
      - 心理學的
      - 生理學的
    - 社會的
      - 心理學的
      - 文化史的
  - 先驗的
    - 客觀化的（論理的）
      - 形式的
      - 內容的
    - 主觀化的

扨て經驗的生成的方法については、今迄論じた所によつて明かなる如く、問題が價値に關する限り、決して先驗哲學の方法として採用することの出來ないものである。高々それの補助手段として役立ちうる程度のものである。從つて先驗哲學の方法

としての生成的方法を考察せんとする今の場合には、此れらを度外視して直ちに、先驗的生成的方法を考察すれば足ると思はれる。先驗生成的方法には今述べた如く、客觀化的方向と主觀化的方向との二つが考へられるが、その客觀化的方向と云つたのは、純論理的生成と考へられるが故に、之れは又先驗論理的方法といふ事が出來るであらう。從つて先驗生成的方法とは廣義に解すれば先驗論理的方法と、所謂主觀化的方法とを包括し得ると考へられるが、此れを狹義に解すれば、唯だ主觀化的方法のみに限ることが出來る。先驗論理的方法については、既に、二、三に於いて大體述べた故に、今狹義に解せられたる先驗生成的方法について少しく考察して見やうと思ふ。

五

ナトルプによれば*彼の所謂再構成的方法と云ふのは、眞の意味での心理學の方法である。彼によれば意識の事實卽ち私が何物かを意識してゐると云ふ場合に三つの要求を區別することが出來る。卽ち意識せられる內容(何物か)と、それを意識する所の我と、次に此の兩者の關係である。此の關係を彼は意識性 Bewusstheit と呼んでゐる。此の關係は意識の雜多なる內容に對して常に同一のものであり、從つて此の內

容の共通的なるものであり、又それらを區別する所のものでもある。此の關係は此れ以上說明し、或は導出する事の出來ないものである。內容に於いて存するが如き如何なる關係によつても、此れを叙述する事は出來ないのである。何となれば此の根源的なる、意識性としての關係は、此れらの內容の關係にも既に、それの基礎に於いて存せねばならぬものなるが故である。從つてかくの如き關係は到底心理學の對象たり得ない。次に自我といふのも凡ての意識された內容に對する、共通的な常に同一なる關係點として意識內容に屬する所の如何なるものによつても說明される事は出來ない。自我とは最も根源的なるものにして、それ自身決して對象とならざる所のもの、それに對してのみ何かゞ對象としてある所のものでなければならぬ。自我が自我を意識するといふ場合に於いても、嚴密に云ふならば眞の自我は、決して意識された自我にあるのではなくして、むしろ意識する自我にある、と考へねばならぬ。故にかくの如き根源的なる自我そのものも決して心理學の對象となる事は出來ない。殘る所は唯だ意識內容のみとなる。實に心理學の對象となりうるのは此の意識內容なのである。然し乍ら此處に注意すべき事は、意識內容と、それを意識する作用とは決して絕對的に區別されたる存在ではない、といふ事である。成程以上

三つのものを意識に於いて區別はしたが、それは單に意識の要素(モメント)としてに過ぎないのであつて、決して獨立的に分離してゐる存在と考へられるのではない。內容は意識內容としては決して自我――それに對して內容がある――に對する關係なしには存せず、又同樣に此の關係も、此の關係に於いて自我に對してゐる所の內容なしには決して存しない。

* 以下の叙述はナトルプの allgemeine Psychologie I, allg. Psych. in Leitsätzen による。尙、同じ問題を取扱つたものとして、Natorp, Philosophie und Psychologie, Logos 1913 がある。

かくて心理學は意識內容を取り扱ふのであるが、その內容と云ふのは、常に現實的なる意識に於いて、卽ち主觀的に與へられてゐる限りに於いてゞあつて、それの客觀的妥當若しくは、客觀的意義などは問題ではないのである。心理學の關心は唯々直接なる體驗の純なる主觀性であつて、凡ての客觀化的認識の關心の如く客觀性にあるのではない。扨てかくの如き主觀的內容に於いても、結合といふ事は全く共通的な徵表であつて、純粹に主觀的なる意識にあつては、如何なる內容も決して孤立的なものではなく、他の內容との複雜なる關係に於いてあるのである。(孤立はむしろ抽象の結果也)かくて心理學の對象は意識の內容――而かも直接なる意識に於ける、そ

れら內容の結合に關して――であると云ふことが出來るのである。

次に心理學はかくの如き對象を取り扱ふに如何なる方法によるか、といふに此處に主觀化的方法の概念が現はれるのである。主觀化的方法に對立するものは勿論客觀化的方法であるが、客觀化的方法といふのは要するに、凡ての法則化的方法であつて、何らかの意味に於いて客觀性を見出し、又は與へんとする方法である、といふ事が出來る。事實の說明は勿論、此れの單なる記述と雖も、既に一般概念を豫想しなければならず、從つてやはり客觀化の方向にあると云はなければならぬ。此の事は學問の領域に限らず、日常生活に於ける種々の表出や、或は道德、藝術、宗敎などの文化の領域に於ける種々の產物の如きも又客觀化の方向にあるものと云ふ事が出來る。

かくの如く考へるならば事實の記述としての心理學はやはり一種の客觀化の學となり、決して心理學の名に値しなくなるであらう。何となれば上にも述べた如く、記述には必ず其の事實を一般概念の元に包攝する事が必要であり、此の一般概念は勿論、合法的關係によつて權利づけられんことを要求するが故である。のみならず記述は分析であり、抽象であり、又媒介であつて、心理學が正に問題とすべきである所の體驗の關係の全體より個々の要素を抽出、分離するのである。

然らば主觀化としての心理學は如何なるものであるか。主觀性とは云はゞ直接性である。卽ち未だ限定されざるものである。然るにかゝる限定されざるものを、限定する、卽ち客觀化する事なくして如何にして捕捉する事が出來るであらうか。主觀化と雖も要するに一種の客觀的化なるものではなからうか。

勿論直接には吾々は(理論的態度として)かゝる直接性に到達する事は出來ない、かゝるものを吾々は直接に捕捉し若しくは觀察することは出來ない。自己觀察に於いて反省するや否や、直接的なものは最早や直接的なものではなくなる、と云はねばならぬ。然らば、主觀化は如何にして可能であるかと云へば、卽ち再構成的方法によつて可能となると云ふことが出來る。卽ち再構成とは複雜なる組織の個々の成素が分析によつて判明に取り出されたる後に、此の組織自身が丁度分析以前に與へられてゐたが樣に、內容上比較的正しく規定せんとするのである。云はゞ著しい諸點が先づ示され固定された後に、それを結合する線を引きそれらを連續的な具體的統一に成し上げんとするのである。かくて一度失はれ、固定された、意識の根源的生活について、無數の豐富な相互關係を以つて漸次に理論的に、又恢復せんとするのである。卽ち有限なるものは、それの源なる無限なるものへ、分離的なるものは同じく連

續的なるものへ還り、かくて根源的體驗の具體的關聯がある程度まで恢復されるのである。此の場合抽象は意識生活の具體的なものが、自らを何らかの仕方で概念になし、或は少くともそれに近づけんとする爲めに必要缺くべからざる道程である。從つて主觀化が一度客觀化されたもの、卽ち抽象され、固定されたものより、それの具體的根源へ還らんとするものである以上、必ず抽象を一度通らなければならぬ事も明かである。然し乍ら此の場合に於いて抽象は決して目的ではなく、單に手段にすぎない。心理學の職分は決して抽象にあるのではなくして、むしろ具體化にあると云はねばならぬ。抽象は唯だ此の具體化の豫備段階となるのである。從つて、心理學のかゝる研究の結果は、單に無限定なるものではなくして、むしろ直接に體驗せられたものゝ最高の限定である。單に無限定なるものへ還へるのではなくして、客觀的に構成され、限定されたものを土臺として、それが主觀への關係を更に構成するのである。客觀化的科學は全然構成的に働き、理解の機關たる概念を構成する、そして限定なきものに限定を與へ現象を對象になすのである。かくて此れら認識の創造的な仕事が全く客觀化的科學の手によつてなされるのであるが、此れらの創造は決して無からの創造ではなく、何らか與へられたものよりの創造と考へなければならぬ。

此處に於いて此の科學の創造物から最も根源的な所與を思想的に再び造り上げんとする課題が生ずるのである。

かくて凡て對象的に定立せられたものを主觀的なる所與の段階に導き還へすのであるが故に、此の主觀化の方法にとつては、客觀化の方法に於けるとは、凡てが全く反對の關係であつて、例へば現象(エルシャイニング)と對象(ゲーゲンシュタンド)の關係の如きも、客觀化認識に於いては現象から對象をつくるに對して、主觀化的再構成は對象から――客觀化的方法にとつては對象は無限に限定せらるべき課題であつて決して與へられるものではないが、主觀的方法にとつては、かゝるものが所與である如くに考へられて――現象を再構成すると云ふ事が出來る。客觀的方法であつたものが、主觀化的方法にとつては、說明(主觀化的意味で)せらるべき現象となるのである。反對に、客觀化的方法に於いて現象であつたものが、今や說明の向ふべき、若しくは基づくべき眞の客觀となるのである。かくて普通の客觀的な對象の實在とは違つた意味での實在の概念が此處に現はれる。然し客觀的實在が單に與へられたものではなくして課題であつた如くに、此の實在も實は、も早や單に「與へられた」ものとは云ふことが出來ない。成程自體に於いては(an sich には)最初のものではあるが、然し概念に對しては常に最後のもの、最

遠のものと考へられる。何となれば概念から再び又かゝるものへ到達しなければならぬからである。

扨て、かゝる主觀化的再構成的方法の取り扱ふべき範圍は相當に廣大であつて、最後にも少し述べた如く認識的方面に於ける客觀化的所產――此の中へは凡ての前科學的並に科學的認識が抱括せられる――のみならず、凡ての文化的活動もやはり廣義に於ける客觀化的方法の所產であつて、從つて此れらに對しても亦主觀化的再構成が考へられるのである。所が一方に於いては又此れら文化的活動に於けるロゴスの反省、換言すれば文化の基礎づけたる哲學卽ち論理學、倫理學、美學、宗敎哲學等は、法則そのものゝ反省、若しくは自覺であり、その限りに於いてやはり法則に基づいてゐると考へられるが故に、勿論客觀的方向にあると云はなければならぬ。――云ふまでもなく最初のものが客觀的方向にあると云ふのとは又別の意味に於いてゞはあるが、――然らば此の第二の客觀化的方向に對しても又主觀化が考へられなければならぬ。かくて同じく主觀化といふも客觀化の種類(認識、道德、藝術、宗敎等)に從つて異なるのみならず、客觀化の段階(文化そのもの、及びそれの反省)に從つても異ならなければならぬ。此の事はナトルプが客觀化の作用自身が又再構成的心理學の問

題となると主張する點などより考へるも明かであると思ふ。

即ち客觀化の方面に於いて自己の中に働いてゐるロゴスを自覺せずに而かもそれによつて客觀化の働きをしてゐるものを假りに無自覺的客觀化と呼ぶならば、かゝるものに關する哲學的反省は自覺的客觀化と呼ぶ事も出來るであらう。此れに對して夫々、無自覺的客觀化に對しては無自覺的主觀化、自覺的客觀化に對しては自覺的主觀化が相應ずると考へることが出來る。主觀化と客觀化とはナトルプも云ふ如く、嚴密に相應する方向と考へねばならぬ。然し此の事は必ずしも兩方向の取扱ふ對象の範圍が相覆ふと云ふ事でもなく、又事實、もしくはそれの系列が二種類あると云ふ事を意味するのでもない。事實は勿論一つである。對立は唯、二つの關係の對立、方向の對立である。現象そのものが內部から生ずるか、即ち主觀的に制約されてゐるか、或は外部の存在から生ずるか、即ち客觀的に制約されてゐるか、或は全く此れら以外の第三者によつて制約されてゐるか、など云ふのではない。むしろ吾々の考察の方向が吾々の現象の捕捉を、主觀的關聯に於いてか、或は客觀的關聯に於いてか、制約してゐるといふ事、そして此の二つの考察の仕方の結付きは、それの捕捉を同時に二つの關聯に屬してゐるものとして、制約してゐるといふ事である。譬喩的

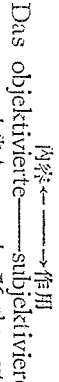
な意味に於いてゞはあるが、今認識について云へば客觀化的認識といふのは意識領域の限界を「外に」廣げんとする働き、云はゞ新しき領土の獲得であるが、かくの如き外に向へる働きに對しては又云はゞ「內に」向へる傾向があるのである。此れは既に得られた領土を確實に所有し、又完全に支配せんとする所の働きである。かくて內への、又は外への方向と云ふのは意識の發展の唯一の過程の兩方向と考へられねばならぬ。或はよく擧げられる譬喩を用ひれば、無限に擴大する所の圓に於ける、二つの方向、卽ち周邊に向へる方向と中心に向へる方向と考へられねばならぬ。

然らばかくの如き客觀化的方向と主觀化的方向との相關性は主觀及び客觀そのものと如何なる關係があるであらうか。さきに作用と對象とはマールブルグ學派に於いては決して絕對的に對立したものではない事を見たが此れによつても察せらるゝ如く、主觀及び客觀も一般に決して絕對的對立をなしたものではない。主觀的、客觀的は全く相對的である、限定せらるべき、從つて無限定への方向が主觀的であり、限定せられた方向が客觀的である。或は又此の對立は Präsentatives と Repräsentatives 個別的と普遍的の對立としても考へられるであらう。かくの如く主觀、客觀の對立が相對的であり、そして又その兩者の關係は相關的關係であるとすれば、此の主觀、客

觀の相關々係と、主觀化的方向と客觀化的方向との相關々係とは如何なる關係があるであらうか。此の兩者は結局は同じものではないかと考へらるゝかも知れぬが、然し嚴密に考へればその間にやはり區別が考へられると思ふ。

今問題を認識の方面のみに限るならば、主觀及客觀の相關性は要するに、作用と內容若しくは對象との間の相關性であつて、此れは既に認識の何れかの見方卽ち方向を豫想して居り、それの中に於ける對立であると言ふ事が出來る。從つて此の相關々係の中には、二つの場合を區別する事が出來る。卽ち客觀化の場合に於ける主觀と客觀卽ち作用と內容との相關性と、主觀化の場合に於ける作用と內容との相關性とである。此れに對して主觀化と客觀化との相關性は、全く方向の相關性、見方の相關性と考へられる。從つて、前の主觀客觀の相關性が、もし客觀化的方向の中に於けるものであるとすれば、かゝるものに對して、卽ち此の相關性全體に對して更に主觀化的方向が成立し、此れに反して、主觀客觀の相關性が若し、主觀化的方向の中に於けるものであるとすれば、かゝるものに對して、やはり客觀化的方向を豫想しなければならぬであらう。されば同じく、相關性（コレラチオーン）と云つても單に主觀客觀の相關性と、主觀化、客觀化の相關性とは序列、もしくは段階が異ると考へなければならぬであらう。

扨て此の結果より、もう一度前の客觀化、主觀化の段階の所を顧みれば、一層それらの關係が明かになると思はれる。先づ主觀化せられるものは必ず客觀化的方向に於いて客觀化されたるものでなければならぬ、卽ち Das objektivierte が主觀化されるのである。此の場合の對立は內容と作用との對立である。然し客觀化されたもの は無自覺的客觀化作用の結果なるが故に、此處には必ず客觀化作用が働らく。此れと最初の主觀化の作用とが對立すると考へられる。此れは勿論方向の對立と考へねばならぬ。扨て次には、此の無自覺的客觀化作用、そのものが主觀化されんが爲めには、此れが更に客觀化されて、第二の Das objektivierte とならねばならぬ。卽ち此處に自覺的客觀作用が働かねばならぬ。此の自覺的客觀化作用に對立して、第二の主觀作用が考へられねばならぬが此の對立は然し、全く方向の對立である。而して此の場合に客觀化されたるもの(自覺的客觀化作用によつて)と、それを主觀化(自覺的)せんとする作用との對立は勿論內容と作用との對立と考へる事が出來る。



かくて一方客觀化の方面に於いては、かくの如く無限に客觀化を進めても遂に客觀化しきれざるそれの限界(無限に進みうるとしても)を認めなければならぬと思ふが、同時に主觀化の方面に於いても客觀化的方向に於ける客觀的統一そのもの卽ち思惟統一、意識統一そのものは、決して心理學の對象として叙述せられる事は出來ない。かゝる統一そのものは決して表象され記述される事の出來ないものであるからである。かゝるものは心理學卽ち主觀化の本來の課題ではなくして、むしろそれの限界或は豫想と考へねばならぬ。卽ち一方客觀化に對しては主觀性そのものが、それの究極的限界と考へられる樣に、他方主觀化に對しては客觀性そのものがそれの究極的限界と考へられるのである。然し勿論此の主觀性、客觀性は固定的なものではなく無限に動的なる、相對的なるものと考へられ從つて限界も勿論無限に動的なるものと考へられねばならぬ。

六

粗雜な叙述ではあつたが以上がナトルプの主觀化的再構成的方法の大要であるが、然らばかくの如き方法が如何にして生成的方法の意味を有し得るか、或は少くとも、かく解釋しうるか少しく考察して見やうと思ふ。

ナトルプの云ふ主觀化的方法といふのは、客觀的なるものを主觀の方に、卽ち直接なる體驗へ還へし、それが元あつた如くに再構成するといふ事、換言すれば抽象的なる媒介されたるものを具體的なる、直接的なるものにかへすと云ふ事にあるが、然しかゝる客觀的なるものは、如何にして生じたかと云へば主觀的なるものより漸次段階を經て發展したものと考へられる。卽ち先づ客觀化的方向に於ける發展、云はゞ客觀的生成を認めなければならぬ。主觀化は度々述べた如く、客觀化を土臺とするが此の客觀化的構成は一つの原理（プリンチープ）、卽ちアプリオリによる統一的構成である限り、必ずアプリオリの統一的發展、卽ち純粹なる意味での生成を認めなければならぬ。此れに對して主觀化は此れらの段階を通じてそれを元へかへすのである。云はゞ客觀的生成の裏返しをするのである。然し此の主觀化の行ふ裏返しは決してそのまゝ順序を反對にするのではなく、それらの段階に於いて主觀の方へ、卽ち具體的意識の方への關係を反省するのである。言ひ換へれば、それらの各段階に於ける客觀的なるものゝ主觀に對する意味を顧みるのである。かくて此れら全體を統一的に見るならばそれら客觀が如何に主觀より生成したかを主觀化的關係に於いて見出す事が出來るであらう。此の場合勿論主觀化的生成は、客觀化的生成を豫想し、それに

基づき、それに卽しなければならず、從つて客觀化的生成がなければ主觀化的生成は決して獨立に存在し得ないのであるが、然し方法論的には兩方法は嚴密に區別されなければならぬ。ナトルプによれば單に方法論的に區別されるのみならず、或はむしろ此の事の爲めに學としても二つのものは區別され、客觀化の方向に於いて、具體的法則學と純粹法則學(先驗論理學は此の中に含まれる)主觀化的方向には、心理學が考へられるのである。然し乍ら、哲學としての客觀化と主觀化とは全く相卽的にして相補ひ、相基づくものと考へられるが故に此れらを獨立の學として區別するよりも一つの哲學の二面と考へることは出來ないだらうか。

以上先驗的哲學に於ける主觀化、客觀化兩面に於ける、生成的方法並にそれらの關係を考へて見たのであるが、今此の狹義に解せられたる先驗生成的方法と先驗心理學的方法との關係を考へて見やうと思ふ。先驗心理學と云つても色々に考方があるであらうが、今リッケルト「認識論の二途」に現はれたる考によつて兩者の關係を考へて見やう。先づ兩方法に共通なる思想を探れば第一、兩方法共に單なる存在ではなくして意味を含んだ存在としての現實の意識を基にしてゐると云ふ事が云ひ得るであらう。リッケルトの場合に於いては此の事は「先驗的心理學は心理的過程

としての現實的意識より出發するが、此の過程そのものを論ずるのではなく、常に心理的以上のものを、卽ち超越的のものを發見せんとする。此の爲めに判斷をその働(Leistung)に於いて考察する云々」など云つてゐる事よりも察せられる。生成的方法に於いては客觀的なるものは、唯、主觀的なるものより發展したと考へられるが故に主觀に於いて、既にかゝるものが含まれてゐると考へねばならぬ。此れに反して單なる存在より價値を導出し、若しくは基礎づけんとすることは先驗的方法とは根本的に相容れぬ仕方である。次に先驗心理學的方法にしても、先驗生成的方法にしても單なる特殊科學の方法と考へらるべきではなく哲學的方法として考へられてゐるといふ事、云ひ換へれば科學(廣義に考へるならば創造的文化行爲)のアプリオリに對する一種の反省であるといふ事、勿論此の反省は、先驗心理學的方法に於いては超越的價値そのものゝ妥當を豫想し、從つて、現實意識を離れて超越的對象そのものを直接に、例へば眞なる文章の論理的意味の分析によつて明かにせんとする所の先驗論理學的方法を豫想し、又一方先驗生成的方法はそれが主觀化的反省である故を以つて、必ず客觀化的反省を豫想すると云はなければならぬが、とにかく兩者が哲學的方法として承認を要求する限り、アプリオリの反省と云ふ意味を缺くことは出來な

いであらう。

然し乍ら同時に兩者は多少相異の點がある樣に考へられる。先づ先驗心理學的方法は、その概念上直ちに生成的方法と云ひ得るか否か。此の事について多少問題が存する樣に思ふ。リッケルトによれば先驗的心理學は內在的意味を明かにする事によつて、先驗的論理學の爲めに二分されたる二つの世界卽ち超越的價値の世界と現實的意識作用の世界との間に橋をかけるのである。此の事は勿論廣義に云へば生成と云ひうるでもあらうが、然し本來の意味に於いては生成とは呼ばれないであらう。嚴密に云ふならば生成にはやはり意識に於ける發展段階を考へる事が必要と思はれる。カントが粹純理性批判の第一版の演繹論に於いて說いてゐる三段の綜合は、第二版の演繹論の說き方が先驗論理的なるに對して先驗心理學的であると云はれてゐるが、然し以上の如き見方から云ふならば、むしろ大體に於いて先驗生成的方法であると云ひ得ると思ふ。勿論此の場合カントの關心事は範疇の客觀性の論證といふ點にあつたのであるが故に、此處に考へられる生成も、やはり客觀化の方向に於ける基礎づけの手段に用ひられてゐるといふ事が出來る。然し一面に於いては又此の演繹の意味が、直觀に於いても、それが客觀的認識となり得んが爲めに

は既にその中に範疇が働いてゐなければならぬことを明かにせんとするものである、と見るならば、客觀的なるものより主觀的なるものへ向ふ方向が、やはりそこに働いてゐる事を見逃すことは出來ないであらう。從つて若しカントが第一版の緒言*に於いて考へてゐた如き主觀的關係に於ける演繹――私の主要目的にとつては非常に重要ではあるが然し本質的にはそれに屬しないと云つてゐる所のもの――をも此の際、行つてゐたならば此の演繹は今私が考へてゐる所の先驗生成的方法に非常に近いものになつてゐたのではなからうかと考へられる。

* Diese Betrachtung (Deduktion) hat aber zwei Seiten. Die eine bezieht sich auf die Gegenstände des reinen Verstandes und soll die objektive Gültigkeit seiner Begriffe, apriori dartun und, begreiflich machen; eben darum ist sie wesentlich zu meinen zwecken gehörig. Die andere geht darauf: us den reinen Verstand selbst, nach seiner möglichkeit und den Erkenntnis kräften, auf denen er selbst beruht, mithin *ihn in subjektiver Beziehung zu betrachten* und obgleich diese Erörterung in Ansehung meines Hauptzwecks von grosser Wichtigkeit ist, so gehört sie doch nicht wesentlich zu demselben.....

次に兩方法に於いて區別せらるべき最も本質的な點は、やはり方向に關する相異點であらうと思はれる。先驗心理學に於いては成程意識そのものゝ心的過程の分析をなし、それに於ける關係をも考察するが、然し要するに、それは手段であつて究極の目的はどこまでも對象の說明である。詳しく云へば內在的意味を超越的なるも

のに對する關係に於いて、卽ち超越的當爲の肯定として理解せんとするのである。從つて勿論客觀化の方向が重要なのである。尤もリッケルトはかくの如き超越的なる對象の本質を明かにする事は、先驗心理學的方法によつては完全になされ得ないとして此の課題を先驗論理學的方法にゆづり、先驗心理學の課題としては對象の認識を明かにする事を以つてしたのであるが、然しかくの如く考へられたとしても要するにその對象の認識は超越的對象に關係する限りに於いてのみ意味ありと考へられ又價値そのものに卽した是認の作用が高調されるのである。從つて成程此の內在的意味に於いて二つの世界の結びつきが成し遂げられ、或は又本源的統一若しくは概念以前のものが最も完全に形成されると云ふのであるが、然し先驗心理學が此の內在的意味に於いて單に對象の客觀的妥當のみを問題とする限りに於いては、或は此の事に問題の重心をおく限りに於いては、かくの如き課題には到底到達し得ないと云はなければならぬであらう。

七

以上は狹義の先驗生成的方法と先驗心理學的方法との關係について述べたのであるが、此處に於いて、もう一度先驗哲學的方法を顧み、前に斷片的に述べた所のもの

を統一的に考へて見やうと思ふ。

先驗哲學的方法の根本課題は經驗(廣義に於ける)の先驗的基礎なるアプリオリを明かにする事にあると云ふ事が出來る。此の事の爲めに先驗的方法は先づアプリオリをそれの純粹性に於いて自覺し、次に此れらのアプリオリが經驗を如何に基礎づけてゐるかを反省する。此の事は既にカントが形而上學的演繹と先驗的演繹とを分けてゐる所以であり、又彼の意を汲んでコーヘンがアプリオリに二つを區別して形而上學的アプリオリと、先驗的アプリオリとなした所以である。然し乍ら形而上學的アプリオリは、それ自身としては全く抽象的、無內容的であり、從つて嚴密に云ふならば、眞の意味に於いて未だアプリオリとは云ひ得ないと云はねばならぬ。形而上學的アプリオリが眞にアプリオリたる意味を持ち得んが爲めには、必ずそれが經驗の基礎として、必然的制約として働いてゐるといふ事が自覺されねばならぬ。換言すれば先驗的アプリオリとならねばならぬ。從つて形而上學的アプリオリと先驗的アプリオリとは二つの獨立なるアプリオリではなくして、むしろ一つのアプリオリの二面と考へられねばならぬ。言ひ換へればアプリオリには當然、形而上學的な要求と先驗的なる要求とが含まれてゐると言ひ得るであらう。然し乍らアプ

リオリは單に以上の二つの方面、從つて又二つの要求を持つのみであらうか。狹義に於ける先驗生成的方法が爲さんと企てゝゐるが如き、主觀的關係に於ける基礎づけの要求をも同一アプリオリの一つの要求と見做すことは出來ないであらうか。

此の場合に勿論次の如き障害があると思はれる。先づアプリオリそのものゝ概念を反省して見れば、それは學問或は文化、卽ち廣き意味に於ける經驗そのものゝ創造的發展の原理、言ひ換へればそれら經驗の構成の原理であり、從つて勿論、客觀化の原理であると云はなければならぬであらう。かくて主觀化の原理をアプリオリと考へるは、語義上より云つても――語義によれば「上から」「原理から」「經驗によらずに理性根據から」等である故――又認識論上より云つても形容矛盾であり、むしろそれはアポステリオリとでも云はなければならぬものゝ樣に思はれる。然し乍ら尙一層よく考へて見ると主觀的方法によつて原理、卽ち客觀的なるものを基礎づけると云ふ事は決して經驗的に與へられたる事實より原理を基礎づけると云ふ事とは同一ではない。主觀化的基礎づけに於ける主觀は、客觀化的基礎づけに於ける客觀と同樣に決して與へられたものではない。此の場合、主觀は、むしろ再構成せらるべき方向であり、從つて事實ではなくして、常に理念であり目標である。從つてアポステ

リオリが經驗的に與へられた事實より原理に行く、若しくは原理を說明する、といふ意味であるとするならば、主觀化の原理は必すしもアポステリオリと考へる必要はないと思はれる。故に、若しアプリオリを狹義に單に客觀化の方向に於ける原理と考へず、更に廣く、客觀化主觀化兩方向を通じて意識の働き一般の原理と考へる事が許されるならば、言ひ換へればアプリオリを廣い意味で意識の方向、意識そのものゝ理念と考へることが許されるならば、主觀化的基礎づけへの方向にもアプリオリを考へる事が許されると思ふ。勿論主觀的基礎づけが、客觀的基礎づけと意味が異なる以上、同じくアプリオリと云ふも兩アプリオリは當然異ならなければならぬ事も明かである。然しそこには又一つの共通點を見逃す事も出來ないと思ふ。かゝる主觀化的方向に於いて認めらるゝアプリオリ――假りに此れを生成的アプリオリと名づけやう。――は、前の形而上學的アプリオリと先驗的アプリオリとが全く別個のものではなくして、同一のアプリオリの二面もしくは二つの要求と考へられた如くに、此れも亦決して此のアプリオリとは別のものではない、やはりそれの一面と考へねばならぬ。卽ちアプリオリは先づ經驗より獨立であり、純粹であるといふ一面を有すると共に、或はむしろかゝる性質を有するが故に又、よく經驗を基礎づけ、そ

れの必然的制約として働きつゝあるといふ一面を有するが、然し同時に又かゝるアプリオリは自己の自らに還らんとする一面、即ちアプリオリが自らの具體的基礎に還らんとする一面を有すると考へることが出來る。此れら同一アプリオリの三つの面は勿論相互に必然的な關係を有し、互に相倚り、相補ふものと考へられる。

先づ形而上學的アプリオリと先驗的アプリオリとの間の關係については前に述べた所であるが、經驗より離され、從つて抽象的、無規定なる形而上學的アプリオリは必然的に內容を得んとし、限定を得て具體的にならんとする。此の點に既に第三の生成的アプリオリに於いて最も明かに自覺される所の、自らの具體的基礎に還らんとする要求の現はれを見る事も出來るであらう。又反對に先驗的アプリオリは內容の必然的制約として働いてゐるといふ自己の本性を眞に自覺せんが爲めには、必ず內容より獨立なる點、內容を離れてゐると云ふ點を自覺しなければならぬ。即ち先驗的アプリオリはどうしても形而上學的アプリオリなる一面を豫想しなければならない。かくて兩者の間には一方には經驗を離れ、それを出でんとし、他方にはそれに還り、それを得んとする所の反對なる方向があるが、然し相互に又豫想し合ふと云ふ、いはゞ相關的な關係が認められるのである。次に形而上學的アプリオリと生

成的アプリオリとの關係を考へて見れば、形而上學的アプリオリは經驗的なるものを離れんとすると云ふ點に於いて、生成的アプリオリとは反對の方向にあるが、――何となれば生成的アプリオリは、單に經驗的ではないが、然し具體的なる主觀の方へ還らんとするものとして、經驗的の方向と一致すると考へる事が出來るからである、――然し生成的アプリオリが主觀化的方向にあると云ふ點より、それに對して必ず客觀的方向を豫想するといふ點に於いて、客觀化の方向を示してゐる先驗的アプリオリと共に、又此の形而上學的アプリオリが、生成的アプリオリに對して、必然的に豫想せられねばならぬ。反對に形而上學的アプリオリは、離されたる內容的なるものを豫想し、從つて先驗的アプリオリを豫想し、かくて自らの具體的根源に還らんとすることに於いて又、生成的アプリオリの一面を豫想しなければならぬことは前述の如くである。卽ち此處に於いても前二者の關係と同樣な必然的相互關係が認められると思ふ。次に先驗的アプリオリと生成的アプリオリとに就いても同樣の必然的關係が認められると思ふ。卽ち先驗的アプリオリは、形而上學的アプリオリが既に內容を得て具體的となり自らの根據を自覺したるものとして、或る意味に於いて、完きものとなつたと云ひ得るが、然し此の完成はアプリオリが客觀的生產者として、そ

れの對象の方面に於ける働きの完成であつて、成程形而上學的アプリオリの方面より見れば自己に還へると云ふ要求が既に充たされてゐるとしても、然し尙全體より見ればそれはアプリオリの半面であると云はなければならぬ。かゝるアプリオリの客觀的働きそのものを反省し、それに於いて自らの基礎を更に具體的なものに見出さんとする要求が生成的アプリオリの要求と云ふ事が出來る。かくて先驗的アプリオリは必然的に生成的アプリオリを要求しなければならぬが、然し又反對に生成的アプリオリの要求が成立せんが爲めには勿論先驗的アプリオリとしての客觀化的要求がなければならぬ。客觀化作用の歩める足跡を直觀への關係に於いて顧みんとするが生成的アプリオリの要求であると云ひ得るならばかゝる作用が働かんが爲めには先づ歩まなければならぬ。卽ち客觀化的要求としての先驗的アプリオリがなければならぬ。此の事は前の形而上學的アプリオリと生成的アプリオリとの間に於いて考へられたことゝ同樣である。

要するに先驗哲學を方法論的に概見すれば以上の如く形而上學的、先驗的、生成的の三つの方法論的態度、若しくは方向を區別する事が出來、それに應じてアプリオリの三つの面を區別する事が出來るが、然し三つの方法論的態度が決して三つの獨立

のものではなくして一つの先驗的方法の三面である如く、アプリオリも、決して三つの獨立のものではなく、一つのアプリオリの異つた要求と見ることが出來ると思ふ。*

* 勿論アプリオリが唯一つしかない事を主張するのではなく、如何なるアプリオリを取つても此の三つの要求が含まれてゐることを述べたのである。

八

以上方法論を中心として先驗哲學の問題を考察して來たが、要するに、最初の制限として先驗哲學の課題をアプリオリ、卽ち原理の基礎づけといふ點に限つたのである。然し乍ら原理は對象なくしては働かない、働くべき目的物がない。原理と對象は全く相關的なものであつて、原理は唯對象があつてのみ、對象に對してのみ働き、又對象は原理によつてのみ限定せられ、從つて對象として存し得るのである。卽ち此の兩者は此れ以上還元すべからざる兩極である。先驗哲學も勿論此處より出發する。* 唯然し先驗哲學は此の際原理を論理的に根本的なるものと考へ、此れが對象を基礎づけるものと考へて、問題を原理に集中し、對象の問題をも原理の問題に還元せんとするのである。かくて原理に關する問題はそれによつて答へらるゝが、對象の問題は決して完全には答へられない。精々の所與へられる物とは、例へば所與性の

範疇の如きものによつて既に構成されたものであるとか、或は又與へられるとは思惟によつて解決すべく、卽ち限定すべく與へられるのである云はゞ、思惟によつて要求されたものであるなどゝ考へられるのである。或は先驗哲學は直接所與の問題には關係しない、それは唯科學の事實に關するのである、として此の問題を片づけるとしてもそれは要するに此の問題を解決したのではなくして單に回避したものに過ぎない。

＊此の事はヴインデルバントの叙述の際に於いても明かに看取されたと思ふが同樣の事をニコライ、ハルトマンも「體系的方法」に於いて述べてゐる。

かくて此處に對象卽ち所與そのものゝ問題を如何にするも避ける事は出來ない樣に思はれる。ニコライ、ハルトマン＊が哲學的方法として記述的方法の正當さを認めやうとしたのも此の點であると思はれる。彼は此の記述を既に多少思惟によつて限定せられてゐる所の「所與」を妥當價値に關係なく、卽ち基礎づけ——此れをなすのが彼の所謂先驗的方法——には全く無關係に、唯既にあるものを「再び與へ」、「統一的に獲得」し、かくて最低段階の對象を與へて先驗的方法の必然的前提として役立ち得ると考へて居り、更に又彼の〝Metaphysik der Erkenntnis〟に於いては實有論的な立場

に於いて、知識論的 gnoseologisch 見方から此の問題を論じてゐる樣である。此れらの問題には今は觸れずに置かねばならないが、然し先驗哲學にとつては、――少くとも原理、アプリオリの基礎づけを中心課題とする限りに於いては――此の問題は、たしかにそれの限界をなすものゝ樣に思はれる。從つて此處に哲學の新しい一領域が存在する事も否定する事は出來ないと思はれる。

* N. Hartmann, Systematische Methode, Logos III 1912.　（昭和二年十二月十四日）

追記。此の草稿中ばにして突然の父の死に會ひ、當時は全く茫然として何事も手につかず、此の稿を續ける元氣さへも出なかつたのであるが、前になしたN君との約束を思ひかへし、進まぬ乍らも筆を取つて漸く成し上げる事が出來た。今讀み返して見るに、全く、筋書の樣な所や、冗漫な所などある上に、全體に生氣もなく貧しき稿が更に拙くなつたことを實に寂しく思つてゐる。然し乍ら今は此の不完全なものにも、私にとつては亡き父の形見として、離れ難き愛著の念の湧き出づるのを禁ずる事が出來ず、貧しきものとは知りつゝも此れを亡き父の靈前に捧ぐる所以である。